

NHKの石川県特集に出演されるそうです。9月9日(土)午前11時『おーい、ニッポン』という番組です。

『ロータリーの友』を読んで、テレビを見るとより面白いのではないかと思います。

<ロータリー情報委員会報告> 鈴木委員長

私も『ロータリーの友』をあまり見ていませんでしたが、クラブのいろいろな役割を担当していると、『ロータリーの友』を見ていないとだめだと思いました。一番興味をもって読んだのは、財団や米山のことです。最新の情報が入っています。幹事や会長を経験しますと、日本や世界のロータリーがどういう方向で動いているかを知ることが大事で、それには同誌しかない。また、『ガバナー月信』も読んでおいたほうが良いと思います。興味深いことが書いてある。とくに担当委員長になられたら、この2誌はぜひ読んでいただきたいと思います。

情報委員会の大きな役割の一つに、新入会員にロータリーとはどういうものかという情報の提供です。また、新しい情報を皆さんに提供していくことです。『ロータリーの友』、もしくはクラブに直接入ってくる情報を解説していかなければならないと思います。私自身そうでしたが、ロータリークラブに入会して、5年、10年経っても、情報教育をまともに受けた経験がなかったこともあるでしょうが、ロータリーとは何か、なかなかわからなかった。聞いても答えが返ってこなかった。やはり、ロータリーの基本的なことや過去のこともお話しするのが役目かなと思っています。

今月は会員増強の月間ですが、会員増強と一体になっていることで、職業分類と会員選考の委員会があります。ロータリーの発展の歴史を見てみると、職業分類は非常に重要な役割をもっています。

1900年、創立者のポーリス・ハリスは何を考えたか。彼は弁護士で、弁護士は依頼者がどの程度本当のことを話しているか、どの程度ウソをついているかを見極めることがまず仕事だといっています。要するに人をまず疑うことが仕事の第一歩だということです。彼は仕事はうまくいったが、心は少しも豊かでは

なかった。それで、いろいろな集まりに行ったときに観察すると、非常に気楽に楽しい話をしている人たちは同業者同士ではなかった。だから1業種1人の集まりをつくったら楽しく過ごせるのではないかと考えた。それで、1905年、業種が違う人が集まる会をつくった。親睦が深まり、仕事上の取り引きやサービスに結びついてきた。ロータリーの最初の頃は、こうした相互扶助の精神が非常に強く、この集まりに入った人たちは、非常に発展した。参加者も増えたのです。

ところが1911年、経営学者のアーサー・シェルドンがロータリーに入会してから変わった。会員だけが利益を得る会合は、社会的に認知をされないだろう。いずれだめになると考えた。当時のシカゴは、だますよりだまされたほうが悪いという世相だった。しかし、倒産や破産が続出するなかで、商売が非常にうまくいっている人がいる。その理由を探ると、職業奉仕だった。自分の職業を通じて奉仕をする。それが報われている。最も奉仕するものは最も報われるということです。ソングに、「四つのテスト」がありますが、これは職業奉仕の基本的な考え方だと思います。このかたちがロータリーの発展に非常に寄与した。互助会的な取り引きはやめよう。ロータリアンだからといって取り引きをして、その人に恩恵を与えることは、社会の公正にも反する。みんなに公正かということです。

2002年の規定審議会で変わるまでは、同業者が認めれば最高4人までは入会できましたが、2002年の審議会で、1業種1人を廃止。現在は1業種5人まで、51人を超える会については10%となっています。このようなことも、情報委員会としてお話していこうと思っています。